

讃岐提灯を活用した学生プロジェクト Terasu の成果と課題に関する研究
—活動内容の社会的位置づけをねらいとして—

15E649 新井 笑菜

1.はじめに

1-1.研究の背景と目的

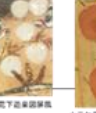
近年、伝統工芸に対する注目が集められるようになってきている。伝統工芸産業は年々規模が縮小してきているのは、ライフスタイルの変容などによって伝統的なものが次世代に受け継がれにくくなってきている現状があるといえるだろう。しかし、このような背景の反省のもと伝統工芸を見直そうというごきがあるのも事実である。本学、香川大学においては「香川大学経済学部学生チャレンジプロジェクト」の支援のもと、学生が主体となって活動する「香川県の伝統工芸品『讃岐提灯』を活用した魅力発信プロジェクト」を行っている。これは、香川県の伝統工芸である「讃岐提灯」を作成・利用して、学生が様々なイベントやワークショップを行い活動するものである。

本研究では、香川県の伝統工芸である讃岐提灯について整理した上で、実践的取り組みである「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」を対象として、その経緯や活動の概要を明らかにする。そのなかで、学生や連携先からの本学生プロジェクトの成果と課題について、またこの取り組みによる社会的な位置づけについて考察していく。

1-2.本研究で扱う提灯について

次章から扱う讃岐提灯についての概要を整理するため一般的な提灯の歴史¹⁾についてまとめた。

表1 提灯の変遷

室町時代	 三才図会	 貞丈提灯	かご提灯の使用があったと思われる	 かご提灯
	 出雲入道提灯	 十世寺鐘提灯	把手付二本柱の構造 折りたためる提灯の登場 二本柱があることが特徴	提灯の原型といわれ、かごに紙を貼って作られている。中国(明)から伝来したものと考えられている
安土桃山	 高松藩家紋提灯	 松平藩家紋提灯	箱提灯の発生 張軸の未発達な提灯	・箱提灯 箱型の提灯で一般的にある提灯のうち最も古い
	 十二ヶ月風俗獅子	 高松藩家紋提灯	張軸がつく 多様な提灯の展開	・ぶら提灯 棒から方形や横四角形の火輪を吊り下げる提灯
江戸時代	 茶すず	 高松藩家紋提灯	ぶら提灯の登場 高張提灯の登場 上下の張軸が確立される	・高張提灯 高所に吊るし目印としてよく掲げられた
	 旗本提灯	 旗本提灯	弓張提灯の登場	・弓張提灯 竹竿の端力を利用して火輪を安定させる

次に「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」で扱う讃岐提灯についてまとめる。讃岐提灯ⁱⁱ⁾は、香川県伝統的工芸品の昭和60年度の第1次指定品目に選定されている。また、2014年には高松市の「伝統的ものづくり」にも位置付けされている。現在は、三好提灯店のみが一子相伝で受け継いでいる。

讃岐提灯は、10世紀以前、弘法大師が仏具の一つとして中国から伝承されたのが始まりとされ、四国八十八ヶ所の奉納提灯としても利用されている。他にも、香川県は雨が非常に少ない故、雨乞いの祈願や、五穀豊穡を祝うあかりとしても使われてきた歴史がある。室町時代以降に入ると、四国八十八ヶ所の遍路道を巡るお遍路さんが考案したとされる「折技法」による「折提灯」が増えていく。この「折提灯」は、香川県発祥とされ、当時は手ぬぐいと竹で作られていた。江戸時代初期には様々な提灯を組み合わせて製作される「一本掛け」という伝統的な技法が考案され、現在まで受け継がれている。この技法で作られた多層構造の一本掛け提灯は香川県独特の提灯とされ、三好家の一子相伝の伝統的な秘伝技法で製作されている。現在では、三好正信氏が考案した「新一本掛け」という新しい技法があり、現代的な様々な形の提灯が製作されており、「あかりの彫刻」として高い評価を受けている。

2.「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」における実践的取り組みを対象としたケーススタディー

「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」は2015年度の本学COC事業の瀬戸内活性化プロジェクトⅠ内の高松観光振興プロジェクトがきっかけで発足された。讃岐提灯は香川県の伝統的工芸品に選定されているが、一子相伝で受け継いでいる故になかなか周知できておらず認知している人々が少ないという現状がある。そこで本学の学生プロジェクトでは、伝統工芸である讃岐提灯を活用し県内でのイベントやワークショップ、展示などを開催することにより讃岐提灯の魅力と同時に、地域の魅力発信や認知を目的として活動している。

屋島山上ちようちんカフェにおいては、店内の提灯のレイアウト構成の他、飲食スペースとは別に讃岐提灯や屋島の夕夜景の魅力に触れることができる「ちようちんの間」での展示を行った。尚、営業期間中は「折提灯」を作ることでできるワークショップも実施している。このように「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」は地域の課題に向き合っていることが分かった。また、参加型企画を行いイベントに足を運んだ参加者を巻き込む取り組みを実施したり、地域や地元企業と連携した活動であることが特徴である。



写真1 ちょうちんの間



写真2 ワークショップの様子

3.「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」関係者へのインタビュー調査とヒアリング調査

第3章ではまず「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」に所属する学生メンバーのリーダー、副リーダー(3年生2名、4年生2名)に対してインタビュー調査を行った。調査において、個人個人が目標や思いを持って活動し、自分自身につながる成長や組織活動におけるコミュニケーションや振る舞いの経験を得ることができていることが分かった。また香川県の連携した地域に対する学びもあることが分かった。さらに今後も継続していく活動であり、伝統工芸の讃岐提灯がより認知度が上がり身近なものになってほしいという声が共通してあがっている。一方プロジェクト活動に対するモチベーションに対しては、学生メンバーそれぞれが課題として認識していることがわかった。

次に「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」の連携先に対するヒアリング調査を行った。本プロジェクトの成果については、伝承元である三好氏によると本取り組みにおける活動の反響として特に小学生に影響が強いということが分かった。連携してイベントを行った川井氏からは、伝統工芸を身近に感じるきっかけとなったり、学生が職人をつないでいるという声があった。一方で課題については、簡単な折提灯から発信してほしい、さらに独自の提灯を発信するなど、新しい方向性を期待していることが分かった。またクオリティの向上など、本質的に提灯を根付かせ残していくこと、そして讃岐提灯に対してはより日常に溶け込む身近な存在になるために、学生らしい本音を取り入れる必要もあるという意見もあった。

4.「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」活動内容の位置づけについての考察

「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」と他美術系大学の類似事例を比較すると、他美術系大学が「(商品・作品をつくること)」に注力しているのに対し「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」は活動目的のもと「(讃岐提灯・香川を)知ってもらうこと」が特徴として明らかになった。その上で、アートの文脈と工芸的文脈から「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」の社会的位置づけを考察すると以下の図1や図2のように示される。尚、本プロジェクトの立ち位置やうごきは黄色で表している。

したがってアートの文脈からみると図1のようなうごきに従った、伝統工芸を使った専門的知識を必要としないアートの演出で伝統工芸の新しい文化を創造・発信しており、ソーシャリー・エンゲイジド・アートⁱⁱⁱのような実践的な活動であるといえるだろう。また工芸的文脈からみると、図2のような日常性から離れつつある伝統工芸を身近に感じてもらうように立ち戻す伝統文化の継承を学生の手で行っていると考える。

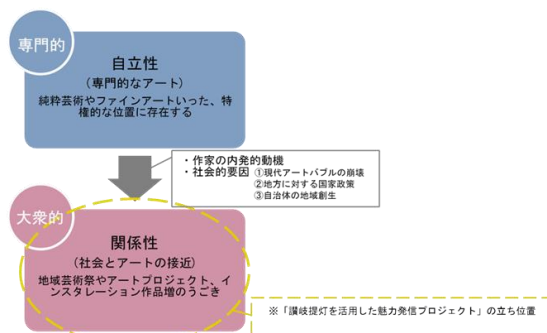


図1 アートと社会の接近(筆者作成)

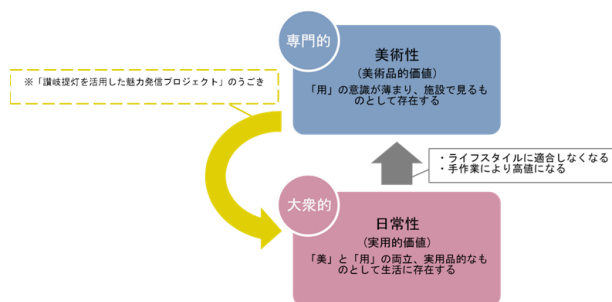


図2 伝統工芸のイメージの変化(筆者作成)

5.まとめ

香川大学の「讃岐提灯を活用した魅力発信プロジェクト」の社会的位置づけを考えるにあたり、結果としてアートの文脈からみると社会課題に対するアプローチという目的をもったソーシャリー・エンゲイジド・アートのような実践的な活動であり、工芸的文脈からみると日常性から離れつつある伝統工芸を身近に感じてもらうように立ち戻す伝統文化の継承であるということがわかった。

これは、アートの側面、工芸の側面の両方の視座からみても社会性や大衆性を意識している活動である。そして本プロジェクトの「讃岐提灯と香川の魅力をてらす」という目的を支えるものとなるだろう。また今後の活動の展開において、社会意識として高尚なアートではなく多様な表現を求めるうごきがあることや、今一度工芸の良さに立ち返り見直すうごきなども後押しをしていると考える。本プロジェクトは香川大学の他の学生プロジェクト活動と比べ歴史も浅いものであるが、まだまだ今後の展開に関して可能性が溢れている。今後より一層、豊かな創造と良き伝統を活かし讃岐提灯や香川の魅力をより多くの人に伝える魅力ある活動であることを期待する。

ⁱ 出典：岐阜市歴史博物館編(1996)『ちょうちん大百科—伝統の技と美—』岐阜市歴史博物館 岐阜新聞・岐阜放送 p11
出典：關重廣(1941)『燈火の變遷』河出書房 付録「日本古燈器變遷圖表」より 筆者作成

ⁱⁱ 高松市(2018)「高松、歴史礼賛〜あかりの心 讃岐提灯〜」2018年10月31日三好提灯店ヒアリング調査より

ⁱⁱⁱ AKIBI plus 事務局(2016)「辺境芸術最前線」公立大学法人秋田公立美術大学 P168 社会関与型の芸術のことを指し、単なる美術制度内での参加体験ではなく、「参加」「行為」に力点を置き、真に社会に寄与するものである